

第44回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞 命の重み

弟子屈中学校 宮下 優心さん



「病気を持って生まれてくる子が不幸であるとは限らない。」
と、むかえびとを
読んで思いまし

た。私は道徳の授業以外で命の重さを深く考える機会がありませんでした。でも、むかえびとを読んで命に価値の違いなどない、また、助産師の仕事の重要さに気づくことができました。

主人公の美歩は助産師として働きはじめて6年になります。たくさんの赤ちゃんを取り上げていくなか、産婦の緊急搬送や飛び込み出産などの色々な困難が訪れて美歩を悩ませます。その妊婦さん1人1人の出産に真険に向き合い、母子ともに無事であることを第一に考え仕事をしています。出産の手伝いのほかにも助産師外来があり、出産前の妊婦さんの抱える悩みや不安の相談にのり、出産をどのような方向で行うのかを話すことも多くあります。その中には出産前の検診で胎児の異常が見つかり、中絶するかそのまま出産するかを相談しに来る妊婦さんも多くいます。私は今まで胎常に異常があると分かっていたながら生んでもその子供が病気で苦しみながら生きていくことになるし、両親も苦しむ

子供を見ながら生きていくから幸せになれないのではないかと考えていました。でも美歩に相談してきた妊婦さんは、「生まなければ一生後悔で苦しむことになる。それなら私は悲しむ覚悟をします。」と決めて出産をしました。生まれた赤ちゃんは生後三十時間で亡くなりましたが、母親は「諦めなくて良かった。この手で抱き上げることができて嬉しかった。」と話しました。このように生まれつき病気がある子供は一生不幸を感じて生きていく人達ばかりではないし、両親も幸せに生きていける選択があることを感じました。また、望まない妊娠をして中絶を相談しに来る妊婦さんも少なくありません。私はそれを読んで、望んでいなかった妊娠だったとしても赤ちゃんには何の罪もないし、望んでも妊娠に至らない女性も多い事を知っているながら、無責任に中絶を選んでほしくないと思います。でも、望まない妊娠をして出産をし、子供に虐待をしたりするならば出産をしない方がその赤ちゃんのためなのかなとも思いました。そして助産師とは「一番最初に新しい命を受け取る大切な仕事」です。そんなにも責任が大きく、自分の行動、判断次第で命の危険に関わる仕事をどうして長く続けていけるのかと考えました。それは、命の死や選択に向き合わなければいけない辛い事があるけど、新しい命の誕生を手伝う事ができる。その喜びがあるからこそ助産師たちは仕事を続けていけるのだと感じました。

私はむかえびとを読むまで命に平等なんてない。病気を持って生まれた子は幸せであっても健康な子とは違って苦しみも背負って生きていかなければならない。そう考えていました。でも、命は平等だし、病気をもの子も両親と幸せに生きていくことを感じ、命の重さについて改めて考えることができました。

書名『むかえびと』

藤岡 陽子 著

（寸評）あなたは本当に優しい心の持ち主ですね。助産師という登場人物の仕事をとおして、命の重さと人の生き方との関わりをととても深く掘り下げ、そして自らに問いかけ考察しています。

この世の中、何が幸せで何が不幸せかはその人の価値観（人生観）によるところが大きいです。自分の価値観で決めつけてしまふことは相手の人にとって、とても失礼なことにもなりえます。

優心さんは人の痛みや悲しみを自分のこととして感じることができます。ぜひ、まわりの人たちにもその心を分け与えてあげてください。



■高校生の部 最優秀賞 幸せとは何か

弟子屈高校2年 村上 栞音さん



あなたは今、幸せですか。

普段生きている中では幸せと感じることはあるだろうか。例えば、毎日美味しいご飯が食べられること、友達や家族とたわいもない会話をしている時、誰かに必要とされている時など人によって様々だと思う。

この本に出てくる主人公、小柳奈ノ花は友達がいなかった。だが、リストカットを繰り返す女子高生、アバズレと罵られる女、一人静かに余生を送るおばあちゃんとお会った。そうして学校であった出来事を話せる人、オセロを一緒にできる人、お菓子を食べながら話ができる人、奈ノ花にとっての居場所ができ、大切な存在となった。しかし、彼女たちの幸せはどこにあるのか、幸せとは何かを考え、自分の幸せを見つけていく。

幸せとは何だろうか。自分は今、幸せなのだろうか。自分にとっての幸せを考えると何ができた本だった。それと、私は奈ノ花のことを羨ましく思った。私は友達が少ない。学校の出来事を話せる人と一緒に遊べる人、自分にとって大切な存在となる人がいていいなと思う。私は、この本を読んでとても心に響いた言葉がある。それは、「ある時気づいたんだ。自分の周りに何もなかった。立派になったはずなのに、褒めてくれる人もいないって気がついた。お嬢ちゃんは幸せにならなくちゃいけない。だから、誰とも関わりを持たないなんて言っちゃ駄目だ」このアバズレさんの言葉が答えを教えてください。暗闇のトンネルから一筋の光が差し込んできたようだった。私は人と関わるのが嫌いになってきた。人と関わり、家族には出ない嫌な自分が出てきてしまう。一人の方が好きだという気持ちになっていった。だが、どこかで奈ノ花のように大切な存在と思える人がもっと欲しいとも思っていた。嫌いなのに関わりたい。自分でもよくわからない気持ちでどうしたらいいのかわからなくて悩んでいたときにこの本とお会い、あの言葉を見て、このままでは駄目だと思った。小柳奈ノ花に言われている言葉なのに、自分に向けられている言葉のようで、とても勇気をもらえた。

小柳奈ノ花は、自分にとって何が幸せなのか見つけるために南さん、アバズレさん、おばあちゃんに聞いてみることにした。最初は答えられなかった彼女たちだが、最終的に出た答えは、どれも心に刺さるものだった。南さんは、「幸せとは、自分がここにいていいって認めてもらうことだ」と答えていた。家族がいなくずっと孤独だった南さん。その場にいなくても、「居場所

がない」と感じることもある。そのように過ごしてきた人にとって、居場所を認めてもらうほど幸せなことはないんだと思う。私も誰かに「ここにいていいんだよ」と認めてもらいたい。アバズレさんは、「幸せとは、誰かのことを真剣に考えられるということだ」人との関わりを諦めていたアバズレさんは小柳奈ノ花とお会ってから、「今日は来るかな、おやつを買っておこう。何を一緒に食べよう。喜んでくれるかな」と奈ノ花のことをずっと考えていたことに気づいた。人との関わりを諦めようとしていた私も、人との出会いは素敵だな、幸せは他者との繋がりがあるとこそなんだと気づいた。おばあちゃんは、「幸せとは、今、私は幸せだったって言うることだ」長い人生を生きてきて、今までが幸せと言えるほど幸せなものはないのかも知れない。私も、その時になってもおばあちゃんのように、幸せと言えたらいいなと思った。

私は、この本から人と関わることは素敵な出会いがあるんだということを知った。もちろん一人の時も幸せはたくさんある。しかし、人との出会いも幸せがたくさんあるというのを知った。みんなの幸せを聞いてたくさん悩んで見つけた奈ノ花の幸せは、「幸せとは、自分が嬉しく感じたり楽しく感じたり、大切な人を大事にしたり、自分のことを大事にしたり、そういう行動や言葉を、自分の意思で選べる」と最後に胸を張って言っていた。今の私は、後悔も反省もたくさんある。こんな今は、「幸せだ」と脳を張って言えない。でも、私はまだ十六年しか生きていない。まだまだ人生は始まったばかりだ。これから先、たくさんの人と関わり、たくさんの出会いがある。人との出会いを大切に、出会いに感謝して幸せを見つけていこうと思った。「いいかいお嬢ちゃん。人生とは、プリンと一緒だ。人生には苦いところがあるかもしれない。でも、その器には甘い幸せな時間がいっぱい詰まっている。人は、その部分を味わうために生きてるんだ」アバズレさんが言っていた言葉のように、人生には幸せがたくさん詰まっているんだと信じて、私もいつか胸を張って「幸せだ」と言えるようになりたい。

書名「また、同じ夢を見ていた」

住野 よる 著

（寸評）読み手を引き込むような書き出しから始まり、自分と作中の主人公を重ね合わせながら書かれている。幸せとは何かということ、本に書かれていたこと、その分析、そこから感じたこと、3つでまとめている。自分が主人公にどのような感情を抱いたか、自分であつたらどう感じるかを等身大で伝えていたため、強くその思いを訴えてくるような力強い文章になっている。高校生らしい、「相手に伝える」優れた読書感想文である。

※生徒の学年は、コンクールが行われた平成30年度当時のものです。